

## 編集者のことば

本誌は、48年度までの都市研究報告の体裁と規格を変えて合冊として刊行するものの2冊目である。この合冊の体裁は、別に記した「都市研究成果刊行要項」(表紙うら)に明らかなように、次年度からは、ただちに学界にも一般読書界にも通用しやすい雑誌と単行本の形式に移行させたいという計画を前提として、従来の体裁・規格をそれに移行させるための過渡的なものである。その計画は、雑誌には、完成された個別論文を、報告書が提出されるに応じて順次掲載するとともに、そのほか都市研究のために必要有益なく種類かの記事を載せ、他方単行本には、とくに長大となった報告書や共同研究の総合報告書などの類をあてたいというのが、その骨子であった。そのような刊行計画は、報告提出者にとっては勿論、学界にとっても益するところが多いはずであるから、これを是非実現したいというのが、都市研究委員会の念願である。しかし、50年度の東京都予算は、新聞紙などでも報道されているとおり、例のないきびしさであって、東京都立大学も、50年度は、実質的には例年よりずっと縮小した予算で、逼塞状態を堪えねばならぬこととなり、都市研究の発展などという新規事業は顧慮される余地がない状態に落ちこんだ。その発展がない以上、この報告書の体裁も、過渡期をもう1年は続けなければならなくなった。それはまことに遺憾なことなのだが、人間の社会にはいろいろなことがあるもので、過渡的体裁の方が好都合だという事実も、1面にはある。それは、提出される報告は、多くは、その研究実施期間が、1、2年以前のものであり、したがってそれぞれの研究着手の当初において予定された完成報告書の体裁・規格は、以前の形式のものであったことによる。単に量の面から端的に言えば、長編となって、計画における雑誌の論文規格からはみだし、むしろ単行本1冊かその1部をなすのがふさわしいと思われるものが、わりに多いのである。前の第48～49号合冊における個別報告がそうであったし、本合冊もそうである。そして、今後提出を予定されるものには、依然として1、2年ないし2、3年前の研究の結果が相当数あるはずである。それらを印刷刊行するには、文字どおり過渡的形式が好都合であるかもしれない。

ここで、研究と行政との1つの矛盾に遭遇する。すなわち、ある年度において都費による研究をおこなえば、その年度中に、その実施の報告が行政的に要求される。この行政報告が、本学の都市研究においても、当初しばらくは、完成された研究成果の報告と同視され後者の提出が当該年度内になされるよう期待されていた。要求はできないが期待されてしかるべきだという考え方だったろう。だが、行政報告は年度内あるいは年度終了時に要求されてもよいが、研究報告の完成は次年度になされるのが当然である。ましてその印刷刊行は、さらにその翌年度になるのが、むしろ自然である。研究結果の検討と報告書の作成は機械的な作業ではなく、頭脳の作業であることからすれば、完成報告書の作成とその印刷刊行とが、毎年3月末日で限られる年度をたちまちこえてしまうことがあってもやむをえない。勿論、これが、何の限度もなくルーズに流れてはならない。また、そうするつもりもない。けれども、そのあたりを合理的に処理できる原則を確立させたいものである。

印刷について生ずる問題は、社会科学的報告書よりも、自然科学的報告書の方が、一般に多くの印刷費を要することである。後者が図版や写真などを大量に不可欠とするところから来ることは、言うまでもない。従来相互に違った慣例をもっていた上記2つの畑の成果を、ここに1つの予算のなかで、そして1つの体裁・規格において印刷するとなると、この問題についても、原則を確立しておかねばならない。その網羅的なものはまだできるに至っていないが、従来前例のないものも、将来必要なものであるならば、このさいに試みようという考えに立って、本合冊中の石井昭他2名のものが印刷された。これは、社会科学的慣例からすればぜひいたくかもしれないが、自然科学的慣例にはずいぶんとがまんして頂いた結果である。この試みを今後の原則の参考資料にさせていただきたいと願ってやまない。